

沖縄における死霊観の歴史的変遷

静態的社会人類学へのクリティーク

Historical Change of the View on the Dead Spirits in Okinawa:
A Criticism of Static Social Anthropology

塩月亮子

はじめに

①異常死と特殊葬法

②死霊の種類

③災因の変化とその要因

おわりに

【論文要旨】

本稿では、従来の静態的社会人類学とは異なる、動態的な観点から災因論を研究することが重要であるという立場から、沖縄における災因論の歴史的変遷を明らかにすることを試みた。その結果、沖縄においてユタ（シャーマン）の唱える災因は、近年、生霊や死霊から祖先霊へと次第に変化・収束していることが明らかとなった。その要因のひとつには、近代的「個（自己）」の確立との関連性があげられる。すなわち、災因は、死霊や生霊という自己とは関係のない外在的要因から、徐々に自己と関連する内在的要因に集約されていきつつあるのである。それは、いわゆる「新・新宗教」が、病気や不幸の原因を自己の責任に還元することと類似しており、沖縄だけに限られないグローバルな動きとみなすことができる。だが、完全に自己の行為に災因を還元するのではなく、自分とは繋がってはいるが、やはり先祖という他者の知らせ（あるいは祟り）のせいとする災因論が人々の支持を得るのは、人々がかつての琉球王朝時代における士族のイデオロギーを取り入れ、シジ（系譜）の正統性を自らのアイデンティティの拠り所として探求し始めたことと関連する。このような「系譜によるアイデンティティ確立」への指向性は、例えば女性が始祖であるなど、系譜が士族のイデオロギーに反していれば不幸になるという観念を生じさせることとなった。

以上のことを踏まえ、災因論の変化を担うユタが、今も昔も変わらず人々の支持を集めていることの理由を考察した結果、死霊にせよ祖先霊にせよ、ユタはいつの時代にも人々に死の領域を含む幅広い宗教的世界観を提示してきたのであり、そのような世界観は、絶えずグショー（後生）という死後の世界を意識し、祖先崇拜を熱心におこなうといった、「生と死の連続性」をもつ沖縄文化と親和性をもつものであるからという結論に達した。

キーワード：災因論、歴史変化、シャーマニズム、アイデンティティ、死霊観